

社協たより

第148号

2010.12.1

点字版あります

【編集・発行】社会福祉法人 直方市社会福祉協議会 〒822-0034 直方市山部側筒谷616-145
TEL 0949 (23) 2551 FAX 0949 (23) 2552
e-mail: nogata-shakyo@fuga.ocn.ne.jp HP: <http://www.nogatashakyo.org/>



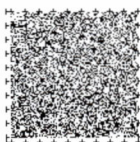
認知症になっても豊かな人生を
あきらめない直方へ

直方徘徊SOSネットワーク推進会議で挨拶する向野市長 詳細は2ページ

もくじ

- 直方徘徊SOSネットワーク 2
- インタビュー、認知症相談 3
- 地域の輪(認知症サポーターを広める会) 4
- 赤い羽根共同募金、ご寄付 5
- 福祉まつり、おもちゃ図書館、もちつき会開催のお知らせ 6

「カンテラ」が
暗い社会を照ら
す、明かりとな
ることを願いた
い。
(T・Z)



高齢化が進む中、重大な問題ばかり。認知症の人と家族の会や認知症サポーターを広める会などのボランティア活動や、患者・家族への支援も広がっている。

「カンテラ」が
暗い社会を照らす、明かりとなることを願いたい。(T・Z)

認知症の母と向き合って12年間、当時は「呆け」「痴呆症」と言われていた。

母は毎朝鏡の前で、化粧をするのが日課、頭は真っ黒のパンチパーマ。掃除を始めたなら、指でなでる程の潔癖症。趣味は日舞。弱視で不自由だったが、勘でギターや三味線と何でもこなすハイクラさんだった。

しかし、腰を痛めて日舞を止めた頃から母の言動がおかしくなった。食事が済んでも「まだ食べたくない」と言い、物忘れが激しい。夜中に起き上がり物を食べるが、朝は全く覚えていない。

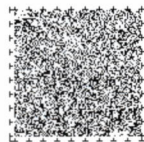
私が母に腹を立てると、母も私に怒り、情けないと私が泣けば、母も泣く。夜中に外に出ない様に、私とまだ小学生だった娘と3人で手を縛って寝た。そして徘徊が激しくなり施設のお世話になった。

認知症の母

kantera

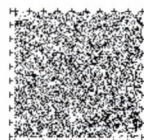
カンテラ





徘徊行方不明者の命を地域で守る

直方徘徊SOSネットワーク



徘徊SOSネットワークとは、認

知症のある高齢者が行方不明になった時、家族から警察署に被害届けが提出された後、家族の承諾を得たうえで、本会から参加登録団体へFAXにて情報を一斉に発信する仕組みです。

参加登録団体には、関係行政機関、自治区・町内会、公共交通機関、民間企業、福祉関係団体、ボランティア団体などが登録し、徘徊行方不明者の迅速な発見と、事件・事故の未然防止に協力します。

直方では、平成22年8月23日に徘徊SOSネットワークが発足しました。その背景には、平成19年から平成21年6月末までに徘徊行方不明者の搜索願が14件、認知症による保護関係者数(搜索願受理除く)は58件、平成20年11月には、認知症の男性が市内で行方不明となり、水路で亡くなるなどの事故が起きたことが挙げら

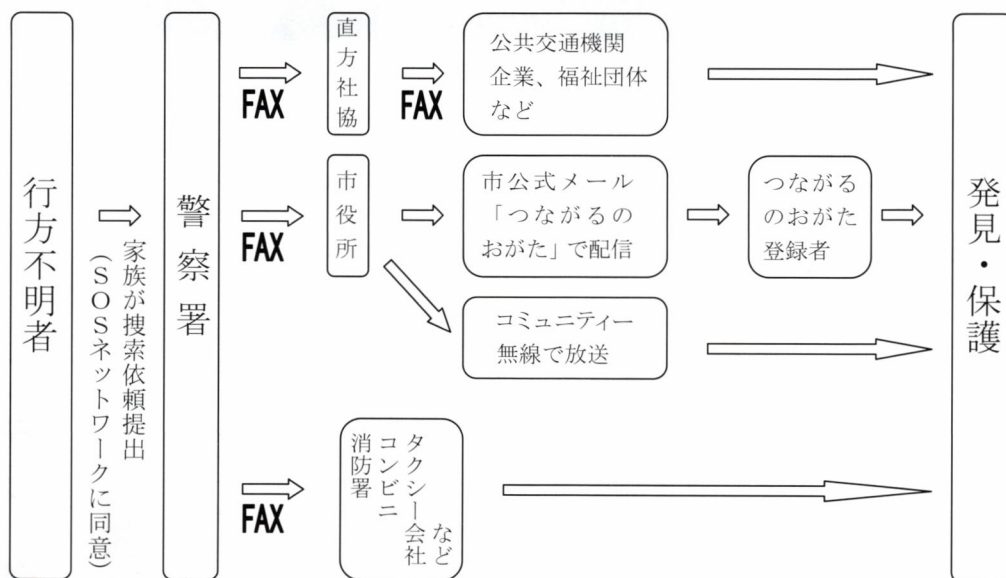
れます。

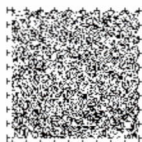
SOSネットワークには、必要性を感じた市民の任意団体や、福祉関係者、一般企業などとネットワークを構築したという意味では、地域住民の善意のネットワークという側面があります。また、多職種、多世代、多分野にわたる地域協働を進めることにもつながり、その意義は大きいものがあります。

徘徊は、死に至るケースもあり、多くの関係団体・市民の登録が必要です。ぜひ、関心のある皆様は、本会までご連絡ください。



直方徘徊SOSネットワークの仕組み





インタビュー

「認知症になっても 暮らせる地域とは」

認知症の人と家族の会 直方
代表 重吉 典枝さん(写真左)
会員 大野 芳美さん(写真右)

認知症の人と家族の会 直方(以下、家族の会)代表の重吉さんと、会員の大野さんに、「認知症になっても暮らせる地域とは」と題してお話を伺いました。

■家族の会に入れたきっかけは？

大野 グループホームを設立した時、家族の会が見学に来られました。その時に私自身が夫の両親の介護を経験していることから、困っていることを情報交換出来ればと思っただけです。

重吉 平成6年に「認知症相談をしてくれないか」と杜協からの依頼があり承諾しました。その時、家族の会の世話人会があつていて、「専門職がいないので相談役になってください」と言われたのがきっかけです。

■ご家族が認知症ではないかと診断された時の心境は？

大野 私自身の経験は、病气から入院して認知症と段階を踏んだこともあり、戸惑いは少なかったが、大変ではありました。

■ご自宅で介護していて大変なことは？

大野 20年前は認知症という病气はまだ浸透してなく、近所の人に「母に何かあったら教えてください」と呼びかけることに、家族が理解を示してくれませんでした。近所の人、迷った母を連れて来てくれた時に初めて家族の理解が得られました。

一番困ったのは、訪問販売の布団や電話などを次々と買ってしまうことで、よく消費生活センターに電話していました。

在宅介護の限界を何度も感じたことがあります。

重吉 家族の会の会員からは、同居の嫁の立場が一番つらいとよく話を聞きます。

■地域で安心して暮らすために必要な取り組みは？

重吉 認知症という病气は一昔前に比べると認知されてきたように感じます。一人で全部することは無理な話で、一人じゃない、仲間がいるという気持ちや地域の理解、介護保険を上手に使うことも肩の荷を少し軽くしてくれると思います。

大野 小さな時から認知症

に対する勉強が出来れば、変わってくると思います。後は退職世代などが勉強し、ボランティアとして参加することも考えられます。

■今まで行方不明になって捜索した経験は？

大野 夫の母とは同居ではなかったのですが、晩御飯を自宅まで取りに来ていました。その途中に道を間違え居場所が分からなくなった時、新聞屋さんに助けてもらったことがあります。

■直方徘徊SOSネットワークの仕組みについては？

大野 徘徊SOSネットワークの仕組みも大事ですが、認知症を理解するための講演活動も大事だと思います。認知症を知ってもらい取り組みが並行して出来たらいいと思います。

重吉 認知症に対する理解者が一人でも増えて、早期発見の目が1つでも増えればありがたいことです。

SOSネットワークが出来たことは直方市にとっても大きな一歩だと思います。

有り難うございました

認知症の悩み

ご相談ください

認知症相談



こんな時は相談してください。

- ・親が認知症かも・・・
- ・認知症について知りたい
- ・介護がづらい話を聞いて欲しい。
- ・利用できるサービスについて知りたい。
- ・同じ悩みを持つ仲間同士の活動に参加してみたい。

【認知症相談日時】

毎月第4水曜日
13時～16時

【場所】

直方市総合福祉センター

【相談員】

認知症の人と家族の会 直方

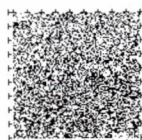
【お問い合わせ】

直方市

社会福祉協議会

☎0949

(26)2551



地域の輪

市内にはさまざまな地域に根ざした独自の福祉活動があります。そんな皆さんの活動をご紹介しますコーナーが地域の輪です。

認知症を学び

地域で支える

認知症サポーターを広める会

代表 村崎 正信



大和青藍高等学校で講演する村崎代表

認知症サポーターを広める会は、認知症という病気を正しく理解するための啓発活動・認知症サポーター養成講座の開催・行政や関係団体と協働してのネットワークづくりを3つの大きな柱として、今年4月に発足した新しい会です。

昨年「えみくる」(直方市男女共同参画推進支援室)の市民ボランティアスタッフとして活動したメンバー5名で立ち上げました。5名全員が、認知症サポーター養成講座の講師資格「キャリアバネイト」を取得し、すでに3回養成講座を開催しました。

フットワークが軽く、呼んでいただければ、職域・地域の小さな集まり、どこでもお話をさせていただけます。認知症を地域で支え、また支えられるためには、認知症という病気を、みんなが正しく知ることが、大切だと思います。また、それがネットワークづくりの第一歩だと考

えています。

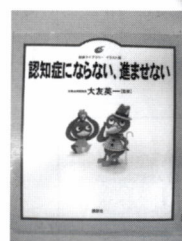
認知症サポーターとは、特別なことをする人ではありません。「認知症の人や家族に、自分たちは孤独ではない、助けを求めれば答えてくれる人たちが、周囲にはいっぱいいる」そう伝えるメッセージャーです。

「明日の自分のためだから」を共通の言葉として、これから地域の皆さんとともに歩きだします。どうぞよろしく願ひします。



ボランティアスタッフの集合写真

図書室



認知症にならない、進ませない

監修 浴風会病院院長 大友 英一

発行所 株式会社講談社

皆さんボケの始まり気になっていませんか。

この本は、予防・治療・介護と三部構成で各人の知りたい事について説明されています。

認知症は、加齢だけが原因ではなく、高血圧・高脂血症・メタボ・たばこ・生活習慣の乱れも原因となります。

認知症の予防や進ませないための生活の見直しに、10項目を指針として述べています。

治療では早期受診の必要性、治療の進歩、新薬の開発などが悪化防止として期待されています。平均16年と言われる介護も、認知症を理解することで、介護者と患者が共に苦労を軽減出来るなどの、指導もあります。

介護の問題について当事者として詳しく知りたい方には、浅野弘毅編集 批評社の「痴呆性高齢者のこころと暮らし」にも深く教えられる事があり、推薦です。

(I・M)

赤い羽根共同募金



五日市での街頭募金を行うボランティア

が、当時は国や県などの公費を民間の社会福祉事業に使用してはならないことになり、民間社会福祉事業が大変な財政困難に陥っていました。そんな状態を救ったのが「赤い羽根共同募金」です。

現在は集まったお金の75%が、私たちの身近なところで行われる地域福祉活動に当てられ、活動の貴重な財源です。

子育て支援、高齢者の生きがいづくり・見守り活動の応援、障害者の移動や就労支援、災害時のボランティア活動など、実に有効に使われています。

そんな募金も、最近では法人募金や戸別募金が中心になりがちで、強制的に募金させられていると思いの方も多いようですが、募金の方法が何であれ、お互いが助け合い、より住みやすい地域社会を創りあげるとい募金活動の原点に返り募金活動に参加して欲しいものです。

この活動は戦後の混乱期に全国一斉に始まりました

「赤い羽根共同募金にご協力ください」と、五日市で賑わうJR直方駅前や商店街で、街頭募金を皮切りに、戸別募金・法人募金・学校募金等の募金活動が今年も始まりました。

のぼりを立て、法被を着た各ボランティアの呼びかけに立ち止まり募金してくれ

ます。人々の気持ちは実に嬉しいものです。

九州アートトラック愛好会 エンド☆ラスト チャリティー撮影会にて寄付

エンドラスト（熊谷会長）は、アートトラックを通して交通遺児育英及び社会福祉への協力を目的としたクラブです。

9月19日、直方市の遠賀川河川敷公園にて、第8回チャリティー撮影会を開催し、イベントの収益金を直方市社会福祉協議会に寄付していただきました。

エンドラスト皆様のご好意に感謝し、いただいた寄付金は、社会福祉推進のため、大切に使用させていただきます。



撮影会にて募金箱を手渡す会計監査白石氏（左）

ご寄付ありがとうございます。
ごぞいいます。

平成22年6月11日〜平成22年11月10日
34件 合計金額762,861円
（お名前は承諾された方のみ掲載、敬称略）

香典返し寄付金

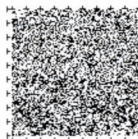
- 殿町 (故)山本 平吉
- 頓野 佐々木 律子
- 下境 川上 壽子
- 感田 西村 タツエ
- 感田 今吉 修
- 日吉町 住吉 一成
- 上境 宮山 好實
- 頓野 大野 満男
- 日吉町 北里 キヌエ
- 上境 早川 輝夫
- 感田 福原 研治
- 植木 (故)伊藤 健作
- 植木 上野 喜重郎
- 上頓野 合谷 アキノ
- 直方 菅谷 ムツ子
- 感田 市岡 友美
- 新町 水摩 泰
- 上新入 安部 初恵
- 頓野 (故)松尾 節子
- 福岡市 栢田 茂
- 赤地 北代 英子

一般寄付金

九州アートトラック愛好会
エンドラスト
会長 熊谷 博幸

- 飯塚市 永峯 修一
- 中泉 (故)長谷川 カナエ
- 頓野 木原 正義
- 殿町 清水 正志
- 山部 藤原 一二三
- 頓野 今村 繁
- 直方 (故)黒岩 伸夫
- 黒岩 操
- 日吉町 立部 孫義
- 中泉 (故)日高 壽子
- 日吉町 松尾 キミエ
- 感田 (故)篠原 セキノ





地域の福祉、みんなで参加

第34回福祉まつり開催

あいにくの雨ではあったが、今年も多くボランティアに支えられて、福祉まつりが10月24日(日)に直方市体育館で開催された。

ステージでは、日本赤十字九州国際看護大学のエイサーサークル「ゆいまるのわ」による元気な太鼓と踊りで始まり、マジックショーやとんちんかん歌謡劇団のパフォーマンス、カラオケに鞍手高校吹奏楽部の演奏と楽しい催しでいっぱいだった。



高齢者疑似体験に参加する子ども

また、見えにくさ体験、高齢者疑似体験、車椅子介助体験など各種の体験コーナーも設けられた。

視力低下、視野狭窄、白内障や、黄班部疾患など眼鏡をかけることでの体験出来、参加の視覚障害者からは詳しい説明も聞けた。

高齢者疑似体験は、障害を持つ人に対する理解を深めることにも繋がるが、高齢者社会の現代、自分自身のために誰もが体験しておきたいことではなからうかと、白内障の状態で箸を使って豆を摘みながら考えた。だが、残念ながら体験する人は子どもや、若い人が多かったように思えた。みんな自分は元気で必要ないと思っているのだろうか。

参加の多くの障害者とのふれあいの場として、各種のバザーや、食べ物、飲み物の提供と共にとても有意義な催しにしたものである。(T・S)

大人の基本姿勢(SOUL)

沈黙(Silence)

子どもを静かに見守り

観察(Observation)

良く観察し、子どもが今何を考え

理解(Understanding)

何をしようとしているのかを理解し

聴く(Listening)

子どもの言葉に心から耳を傾ける



芋掘りに参加した子ども

子どもたちに接するスタッフの心構えとして、館内には掲示の言葉があります。

来館された、母親が「親の子育てと同じですね」と賛同していただきました。

この考えを基に、おごらず、たかぶらず、利用していただく方々と豊かな時間を共有したいと励んでいます。

誰でも遊べて、友達いっぱい

おもちゃ図書館のおがた



牛乳パックを使用した座椅子は、なかなか安定出来ない子どもの体型に合わせ手作りの利点を生かして作成し、その子は今歩いています。

喜びそうな小物の作業は数も必要で疲れますが、受け取る笑顔に、次の作成の元気をもらっています。

10月に開催した芋掘りでは、植え付けから除草までのT氏・K氏の努力が実り44名の歓声と共に芋も大盛況でした。

これからの課題としては、幼児利用者の増加に対して安全性の強化や障害者施設等が利用しやすいよう臨時開館日での対応です。

子どもと保護者に作ってもらう図書館であり、より積極的に布絵本・絵本の紹介などおはなし会で子育ての仲間に加わっていきたいと考えています。

12月18日にはクリスマス会も実施します。ぜひ遊びに来てください。(K・T)

日曜会いの広場「もちつき会」開催

「もちつき」を通じて出会いとふれあいを深めます。多くの参加をお待ちしています。



日時

平成22年12月19日(日)
9時~13時

場所

直方市総合福祉センター
(直方市山部616-1145)

お問い合わせ

直方市社会福祉協議会
☎0949(23)2551

編集後記

全国の認知症高齢者は、10年後の平成32年には289万人、平成42年には353万人になると推計されています。直方市においても、認知症高齢者の増加は、決して他人事ではありません。

認知症は、予防に対する取り組みも大切ですが、認知症になったとしても安心して暮らせる地域づくりの必要性も考えさせられます。皆さんのお住まいの地域はいかがでしょう？(M)

